

追憶の森・欲望の森 ——『お気に召すまま』小論——

松 本 一 喜

1

シェイクスピアの『お気に召すまま』では、「プロットの展開の発端となる対立は、長子相続制による相続をめぐる環境から生じている」(Montrose 30)。たしかに、劇は、オーランドーの長子相続制への呪詛に満ちた台詞によって始まる。亡き父サー・ローランド・ド・ボイスは、新しい家父長である長子オリヴァーに、三男オーランドーをりっぱに養育するよう命じたにもかかわらず、オーランドーは、「兄はおれを下男たちといっしょに暮らさせ、弟という地位から締め出している」(I. i. 13-19)¹と、兄への強い憤懣をもらす。彼は、兄への憤りを言葉だけではなく、じっさい、兄の首を締めるという行為に示しさえする。長子相続制度は、家父長制度の根幹をなすが、弟の兄への暴力は、劇のなかではまだオーランドーの個人的私怨の範囲に収まっているとはいえ、本質的には、家父長制度そのものへの反抗と考えられる。

兄弟の争いが一荘園で起こることであれば、社会的な影響もさしたるものではない。しかし、世襲財産が広大な封建領土であり、世襲の地位が公爵という地位であったらどうであろう。事は、国の安寧にも関わることとなる。この劇のオーランドーと並ぶもう一方の主人公ロザリンドの追放の経緯に関わるのも、封建領土の公爵家における長子相続制の矛盾である。劇の開始以前において、ロザリンドの父である老公爵は、実の弟である現公爵のフレデリック公によってアーデンの森に追放されている。ロザリンドの追放は、父の追放から派生する二次的産物である。この劇開始時点での封建領土は、宮廷というレベルにおいても荘園のレベルにおいても、封建制度の根幹をなす身分制度・長子相続制が踏みにじられた状態にある。

『お気に召すまま』の劇的世界は、こうした宮廷、荘園における無秩序が社会全体にも広がりを見せて、封建制度がいわば「全般的危機」を迎えている社会である。過去の「善き封建制度」の目撃者である忠実な下僕アダムやオーランドーが、「なんと情けないご時勢だ、立派な美德がその持ち主にとって害毒になるとは！」(II. iii. 14-15)とも、「いまは汗水流すのもすべて立身出世のためにすぎん」(II. iii. 60)とも嘆く社会になっている。

ロマンティック・コメディと呼ばれるこの劇は、オーランドーとロザリンドの恋の成就の物語であるといわれてきたが、二人の若者の恋が成就し、喜劇が大団円を迎えるとき、二人の住む社会もまた理想的なヴィジョンを取り戻していなければ、観客の胸のわだかまりは解消しないはずである。この劇は、アイデンティティ・クライシスに陥った個人(ロザリンドもオーランドーも身分制社会のなかでアイデンティティの根幹をなす社会的地位を喪失している)と同様に、社会が、そのありうべき姿を模索し、ついにはその姿を回復する劇である。この小論では、二人の恋人の恋の経緯を追うよりもむしろ、アイデンティティ・クライシスに陥った社会あるいは共同体がどう自らを再生させていくのかを中心的な関心としてこの劇を読んでいく。

この劇の主演は、表層においてはオーランドーとロザリンドの二人である。しかし、深層における主演は、劇舞台という表層から身を隠し、深層において暗闘を繰り広げる「不在の」二人である。一人は、オーランドーの父サー・ローランド・ド・ボイスであり、もう一人は、コリンの主人である。まず、サー・ローランド・ド・ボイスから考えよう。彼は、オリヴァーとオーランドーの父である。彼は、理想的な宮廷人・騎士である。彼のもつ価値観は、息子のオーランドー（及び改心した後のオリヴァー）が試練の末体得できるかどうかという理想的な社会秩序の根底をなす価値観である。この劇の喜劇的結末のための重要な要素であるオリヴァー・オーランドー兄弟の不和の解消も、父の持つ人格的・精神的遺産を、二人が受け継ぐかどうかに関わっている。オリヴァーは、父の財産や地位だけではなく、父の人格を受け継ぐことによってはじめて、家父長としての権威を獲得し、家族の融和の中心に位置することができる。荘園を経営するジェントリーの一家族という小さな単位ながら、家族という社会制度の秩序の継続が図られることになる。オーランドーは、アーデンの森に行く前は、父の精神的遺産を可能性という形で持っているにすぎない。彼が、老公爵の娘のロザリンドと結ばれる² ためには、試練を経てその徳を可能性から現実性に変えなければならない。オーランドーのアーデンの森行きは、そのためのものである。

そのアーデンの森は、死者であるサー・ローランド・ド・ボイスの魂が帰属する場所である。アーデンの森の中心には、老公爵が主催する宮廷が位置する。森の宮廷で、老公爵やお付きの宮廷人がつくる共同体は、一世代前のサー・ローランド・ド・ボイスが存命中の時代の宮廷が追憶の中で蘇った共同体の理想的姿である。彼らは、“brotherhood” と “fraternity”、さらには “hospitality” にあふれた生活をしている³。過去にあったであろう平和で、適度に豊かで、同胞愛によって成員が結ばれていた共同体の姿を具象化して観客に提示する役割を負っているもの、それがアーデンの森の中心に位置する森の宮廷である。「善き家父長制」の時代の理想的共同体として描かれる森の宮廷は、〈追憶の秩序〉⁴ と呼べよう。森の宮廷という追憶の中の想像的社会は、人間社会の秩序が危機的状況に陥ったとき、われわれがあるべき姿をそこに求める理想的社会である。

この劇の劇構造については、さまざまなことが言われる。この劇は、宮廷→アーデンの森→宮廷という牧歌⁵ 劇の劇構造を持つとか、アーデンの森には、分離→移行→再統合という通過儀礼⁶ の構造が見られる、あるいは、この劇の「緑の世界」(Frye) は、「農耕神祭的な祝祭世界」(Barber) を持っていて、一種の「逆さま世界」(Babcock) を構成している、などなど。いずれも二人の恋人の個人的経験に限定して表れる構造ではなく、社会そのものの再生のメカニズムの形式を劇構造に反映したものである。ここでは、こうした変容のメカニズムを可能にするこうした劇構造を〈追憶の秩序〉と呼ぶことにする。

〈追憶の秩序〉とは、現在を生きる人間が、自分たちの存在を依拠する先祖たちの霊の住まう場のことである。アーデンの森に住まう老公爵やその老公爵を慕い集う宮廷人は、息をし、陽気に歌い、狩りをしているが、過去の亡霊なのである。彼らは、現在を生きる人間たちの追憶のなかによみがえり、その追憶のなかで過去にあった理想的共同体の豊かなイメージを喚起する。アーデンの森は、人々の心のなかに追憶される過去の想像世界であるが、その想像世界を観客の前で現前させる劇の結構なのである。

チャールズ 噂ではすでにアーデンの森にお着きになり、おおぜいのご来衆ともども、そこで昔のイギリスの義賊ロビン・フッドのような暮らしをされているとか。毎日大勢の若い紳士たちにとりまかれ、なんのわずらいもなく時をすごしているさまは、まるでかつての黄金時代のようにそうです。（I. i. 114-19）

追憶は、サー・ローランドが臣下として仕えていたころの一世代前の老公爵の宮廷から、ロビン・フッドが活躍していたイギリスの古き良き時代へと遡り、その追憶は、さらに黄金時代へとたどり着く。黄金時代は、アダムやイヴが追放される前の楽園のイメージを喚起する。オーランドーがアーデンの森に至るとき、彼に忠実に付き従う老僕の名がアダムなのは偶然ではない。「森のなかの公爵は、男性的兄弟愛の中心、父性愛のイメージとなっている。この友愛集団は、『善き統治』とよばれ中世から受け継がれてきた大家族の父権制のイメージとなっている」（岩崎 32）。森の宮廷は、黄金時代に始まる、共同体が共有してきた理想的社会像の継承を背負う存在なのである

この劇のオーランドーの父、サー・ローランド・ド・ボイスは、社会が共同体の成員全体の秩序を可能にする過去からの遺産そのものを象徴する。アーデンの森を「緑の世界」とも呼び、この空間に特別の力⁷を付与するのは、人間がこの〈追憶の秩序〉に自己の住まう共同体の秩序の再興のモデルを求める願望の持つ力に他ならない。

森の宮廷は、すべての物質的欲望から自由な存在として描かれている。この劇は、フレデリック公の封建的封土に蔓延する無秩序と欲望への処方箋としての森の宮廷を牧歌的に描くばかりでなく、悪や無秩序を生産する欲望を封じ込める仕掛けをアーデンの森の周辺にしのばせる。

3

追憶の秩序を構成するアーデンの森の周辺に今ある異物が肥大しつつある。資本主義という「欲望」の自律運動が根付き始めたのである。この劇の深層構造におけるもう一人の主演、羊飼いいコリンの主人は、この欲望をアレゴリカルに体現する人物である。おなかをすかしたロザリンドらが“hospitality”をコリンに求めると、コリンはこんな返答をする。

それはまあおかわいそうに。
あっしのためというよりその娘さんのために、
お助けできるほど金持ちでありゃよかったんですがね。
なにしろあっしは人にやとわれてる羊飼いでして、
てめえが世話する羊の毛一本すら自由になりません。
あっしの主人ってえのがまたけちのかたまりでして、
天国への道を捜す気なんかねえんでしょうな、
人を親切にもてなすなんて思いもよらねえ男です。
それにまた主人の小屋も、羊の群も、牧場も、
売りに出されているところですし、羊小屋には、
主人が留守なもんですから、召し上がりものが、
なんにもねえ始末です。

（II. iv. 73-84）

牧歌劇の舞台であるアーデンの森に住まうコリンは、「とにかくおいでください、心から歓迎はしますから」といって“hospitality”をロザリンドらに示す。しかし、ロザリンドらは、この後この“hospitality”を金で買い受けるという牧歌劇の約束事に反した不思議な行為に出る。森の宮廷は、“hospitality”が無償で提供される場所である。この森の周辺は、“hospitality”が有償で売買される場所なのである⁸。

「けちのかたまり」とされるコリンの主人は、「欲望」そのものを体現し、人間的な装いを全てかなぐり捨てた「資本」の原初的形態である。商品は、人の関係から人格を剥ぎ取り、モノの関係に変える。彼が人格を剥ぎ取られ、コリンの主人として生身の体を劇中に表わさないのは当然と言える。その彼こそフレデリック公爵の宮廷、オリヴァーの荘園、宮廷や荘園や、それを包含する社会に「悪」を噴出させ、共同体を無秩序に突き落とす力の象徴である。重要なのは、彼の体現する解き放たれた「欲望」が自律的な力として社会のあちこちで立ち現われ始めて、社会を無秩序に陥れようとしていることである。「欲望とは、安定をくつがえす危険な力であった」(Eagleton 102)。アーデンの森の周辺は、こうした不安定要素の〈封じ込め装置〉である。宮廷や荘園、そして社会全般に蔓延しつつある欲望の源を共同体の外に追いだし封じ込める装置、それがアーデンの森の周辺がもつ役割なのである。

これまで「緑の世界」とか「祝祭世界」とか述べられてきたアーデンの森は、仔細に見れば、中心の「善き封建制」を表象する森の宮廷と周辺の商業資本主義的牧羊地という著しく対立する2要素からなる複合的なモデル⁹を形成しているのである。前者の森の宮廷は、これまで述べてきたように、人間が累積してきた文化的・精神的・倫理的遺産の正の追憶装置であった。では、後者のコリンの主人の住まう森の周辺は、何なのだろう。これは、社会が社会内部の異分子や異物を社会の外に排除するための負の〈封じ込め装置〉とも呼べるものである。今、エリザベス朝の社会に著しく力をもたげてきた資本制という経済的力は、社会を根底から覆えず転覆的な力として現われようとしている。こうした社会的脅威を共同体の外部にあるものとして排除し、想像世界の中に封じ込めておく〈封じ込め装置〉、それが森の周辺である。役割の点から言えば、追憶装置が理想的な姿を呼び起こす肯定的なイメージをかき立てるのに対し、この負の忘却装置とも呼べるものは、人間に対し反面教師として否定的なイメージをかき立てるものを封じ込める役割を持っている。次に述べるロザリンドの恋(これを性的欲望と呼ぶことにする)は、この負の装置の中で観客に性的欲望の危険性を喚起する。しかる後、秩序だった(封じ込められた)性的欲望は、森の宮廷に移動し、肯定的なものとされ、秩序化される。仔細に見てみよう。

4

『お気に召すまま』の主筋を構成するオーランドーとロザリンドの恋物語は、「欲望」をキーワードとして読み解くと、どういう意味を持つのだろうか。これまで語った欲望の対象が財貨・権力であったとすると、二人の恋物語で問題になるのは、性的欲望である。結論的な言い方をすれば、性的欲望を解放し、その危険性を確認し、しかる後、その欲望を無化し結婚という制度に回収してしまう、というのが二人の恋が辿る道筋である。ロザリンドらの恋物語とこれまで語った社会的欲望の物語は、相似形をなしているのである。

中世・ルネサンス期を通じて、女性に対するイメージは、男性の欲望にしたがって変化してきた。オーランドーの作るペトラルカ風恋愛詩は、ロザリンドという女性の現実性を剥ぎ取り、彼

女を天の高みにまで高めるものである¹⁰。ペトラルカの恋愛においては、恋が結婚に終わることはない。結婚の外に花咲くもの、それが恋愛だった。女性は、性的欲望を剥ぎ取られ、男性が観念的に作り上げた女性像を守るしかなかった。ある意味では、生身の女性は自己を殺し男性の創り上げた想像の女性像に殉じなければならなかった。女性の理想化は、女性の現実的存在を抹殺する「女性殺し」でもあった。

アーデンの森での恋の進行は、まさにこうした恋愛への異議申し立てである。それは、同時に女性の肉体的存在の確認、性的存在であることの訴えである¹¹。ロザリンドがギャニミードに扮してのオーランドーへの恋の教育、それは恋の現実を知ること、男女関係の現実を知ること、肉体を持った現実のロザリンドを愛することを教えることであった。それは、結婚という現実のなかで二人が結ばれることをオーランドーに訴えることでもある¹²。劇終わり近くのハイメンの祝福の歌は、死によって永遠に結ばれるペトラルカ風恋愛ではなく、結婚に結びつく結婚愛の賛歌である¹³。

それまで女性は、家父長制社会において子をなすことを最大の存在理由として生きてきた。しかし、そうした性的存在であることが彼女らの尊重ではなく、差別の理由とされてきた。しかし、今、この劇において、女性は確かな存在感を見せ始めている。男性は、そうした女性の示す確かな存在感に対し、心の奥底で言い知れぬ恐怖感を覚えたにちがいない。

男性のその恐怖感の劇的相関物は“cuckoldry”（寝とられ男）のイメージである。劇中でいかに頻繁に“cuckoldry”が問題にされていることか。ロザリンド／ギャニミードとオーランドーとの機知に富んだ陽気な会話のなかに、あるいはタッチストーンの皮肉のなかに、そして、森の宮廷人のコーラス（IV. ii.）のなかでこの“cuckoldry”が問題にされる。さながら「シャリバリ」¹⁴ そのものが劇中に展開されている観がある。

アーデンの森の周辺部において、ロザリンドの性的欲望が陽気な喧騒のなかで解放されつつある。ロザリンド／ギャニミードとオーランドーとの恋は、ロザリンドの積極性、オーランドーの受動性によって特徴づけられる。家父長制のなかの男の権威そのものが脅かされつつある。こうした危機的状况をどう沈静化し、秩序を回復するのか。二重、三重にこの性的欲望は封じ込められる。一つ目は、こうした性的欲望の顕在化を森の宮廷のなかではなく、森の周辺に排除することである。ロザリンドは、その容姿のみならず¹⁵、老公爵の唯一の後継者であるという身分は、男の欲望を喚起せずにはおかない存在である。彼女は、森の宮廷において父と会っても、自分の素性を明らかにしない。なぜなら、彼女が森の宮廷において身分を明かし、ロザリンドとして存在すれば、男のあいだに性的欲望と身分に付随する権力への欲望を喚起してしまい、森の宮廷の“brotherhood”や“fraternity”という男性中心社会の根本の感情にひびがはいってしまうからである。森の宮廷からコリンの主人が体現する物欲が森の周辺へ排除されるように性欲と権力欲を喚起するロザリンドもまた森の周辺へ排除されなければならない。二つ目に、ロザリンドの恋を日常空間ではなく特別な〈非日常空間〉での出来事とすること、つまり、祝祭的空間の一時的な〈無礼講〉の出来事とすることである。ロザリンドという生身の女性ではなく、ロザリンドがギャニミードという男性に扮した〈無礼講の王〉が行なう「ふざけ」とすることにより性的欲望は脱現実化され、そうすることによってロザリンドの体現する性的欲望は無化される。三つ目に、ハイメンの祝福の前に、ロザリンドに家父長制への服従を誓わせることである。女性に戻ったロザリンドは、家父長制社会が理想と見る女性像そのものとなる¹⁶。恋愛という性的欲望の解放は森の周辺でなされ、結婚という性的欲望の秩序化は、森の宮廷に移動してなされるのである。

『お気に召すまま』という劇を、「欲望」という言葉をキーワードとして読み解いてきたが¹⁷、ここに見られるのは、欲望の抑圧である。封建制という緩やかにしか変化しない社会は一見安定した社会に見えよう。封建制度の内部で生まれ、育ち、ついには生みの親である封建制度を内部から食い尽くしてしまう鬼っ子の資本主義は、欲望を自己の運動法則の原理として取り込んでいる制度である。『お気に召すまま』という劇は、滅びゆく封建制度が、それまでの善き封建制の思い出を森の宮廷という〈追憶の秩序〉とし、絶え間のない変化と喧騒のなかに社会全体を陥れる資本主義を招き入れる「欲望」を封じ込めようとする劇である¹⁸。この劇的構造を空間的に配置し、その表現を可能にしたのが二元的構成を持つアーデンの森の創造である。この森は、欲望から解放された社会の肯定的なイメージを表象する森の宮廷と、欲望の危険性を感じさせる周辺部の二区分からなる。この劇は、アーデンの森という架構世界とフレデリック公の現実世界が対立し、前者が後者を制覇することで秩序が回復される劇ではあるが、この劇はさらにアーデンの森を二分して、社会のダイナミズムをもっと陰影豊かなものとして描き出すことを可能にしている。このダイナミズムとは、巨視的な言い方をすれば、封建制と資本制が混在する絶対王制下のエリザベス朝社会の「封建制も資本制も、いっぽうが他方の対極にあるという『単純な』対立関係にあるのではなく、それぞれが、たがいに相手のなかに内在するという、こみいった『脱構築的な』対立関係」(Eagleton 101) のことである。「現実社会」と「緑の世界」の単純な対立図式は、われわれを秩序と調和に満ちた遠い世界に遊ぶのを可能にしてくれるが、脱構築的な〈追憶と欲望の森の世界〉は、この『お気に召すまま』の示す劇的ダイナミズムのなかにわれわれもまた生きていることを自覚させてくれる。

注

¹引用は、すべて (Latham, Agnes, ed. *The Arden Shakespeare: As You Like It*. London and New York: Routledge, 1991.) による。

²彼は、恋に落ちる若い二人の共通の価値観を代表し、彼の名を告げるところから二人の恋は始まる。

オーランドー サー・ローランドの息子、末の息子であることが、

おれのなよりの誇りだ。たとえフレデリック公の

世継ぎにするとと言われても、この名を変えたくはない。

ロザリンド お父様はサー・ローランドをご自身の魂のように

愛しておられた、世間の人たちも同じ思いだった。

(I. ii. 221-226)

³こうした森の宮廷は、人々のあいだに結ばれる「身分契約」、そのなかでも特に「兄弟盟約」と呼ばれる関係によって成立している「共同体(ゲマインシャフト)的」な社会とってよかろう。ここでいう兄弟盟約は、人々の法的な全資格を、すなわち彼らの相対的な地位と社会的な行動様式とを変更することをその内容とする契約の形態のことである(マックス・ウェーバー『法社会学』)。こうした「共同体的」な社会は、貨幣を媒介とした商品交換によって成立している貨幣経済と著しい対照をなす。森の宮廷においては、“hospitality”は無償の行為であるが、コリンの主人の住まう(もっとも不在地主ではあるが)森の周辺部は、“hospitality”も商品よろしく売買される貨幣経済社会となっている。

⁴「死者への記憶を共同体の成員に喚起する方法のひとつ。…かつては共同体の成員でありながら、いまは聖なる空間に棲む死者への追憶に支えられている秩序編成のあり方。」(荻野 10.)「追憶の秩序はこのように共同体崩壊の危機が生じたときの処方箋である。」(14)

⁵牧歌形式は、失われた昔の秩序を回想する文学的〈追憶装置〉と呼べるだろう。

⁶アーデンの森は、ヴィクター・ターナーの言う「コムニタス」、つまり通過儀礼でいう「リミナルな状態」にあると言えよう。（ターナー 128-29）

⁷一例を挙げれば、五幕四場におけるフレデリック公の突然の改心である。彼は、森の老公爵を討たんと強力な軍勢を率いて森にやってくると、「たまたま一人の年老いた隠者とお会いになり、しばらく問答を交された結果、翻然と悟られてか、心を改めてその企てもこの世をもお捨てになるご決意、公爵の地位を追放された兄君にお返し」（V. iv. 159-62）することにする。この「隠者」こそ＜追憶の秩序＞の持つ過去から累積してきた人間の文化的遺産が擬人化されたものである。

⁸この劇において“hospitality”は、いわば通貨の役割を果たす。通貨の流通可能性は、その通貨の流通する共同体の範囲を確定する。森の宮廷では、“hospitality”は無償で与えられる（実は、「権威」という見えない価値と交換されるのだが）が、森の周辺では、“hospitality”が有償で売買される。森の周辺という共同体では、物は人格を剥ぎ取られ「商品」となっている。封建制の指標である“hospitality”が有償となる森の周辺は、“hospitality”が無償で提供される森の宮廷とは異種の共同体なのである。

⁹なぜこうした異質的な2要素が境界を隔ててアーデンの森で同居しているのか？老公爵の不実の息子は、コリンの主人だからである。資本主義は、“hospitality”の落とし子である。劇中、森の周辺で発生する物質的欲望は、森の宮廷に移動し無化される。この劇中のヴェクトルの方向は、歴史の中で生じた経済的・社会的運動の方向とは正に逆である。資本主義は、封建制度の贅沢から生まれた。森の宮廷が示す“hospitality”は、多大の消費（それは同時に、贅沢品の生産とそのための技術）を生んだ。コリンの主人の父親は、森の宮廷の老公爵なのである。こうした事実は、森の宮廷の“hospitality”から物質的要素がかき消されることで隠蔽される。なお、こうした贅沢は、王や貴族の（特に結婚外の）恋愛から生じたものである。ロザリンドとオーランドーの恋愛からは、物質的側面は消去され、目には見えない。こうした物質的側面の消去は、現実世界からアーデンの森という架空空間に場所を移し変えることで可能になる。その意味でこの架空空間は、イデオロギー装置である。こうした歴史的経緯は、ゾンバルトの『恋愛と贅沢と資本主義』に詳しい。

¹⁰彼は、ロザリンドを次のように称える。

天は造化に命じたり、
あまねく美德えりすぐり
ただ一人の身満たすべし。
造化はただちに集めたり、
ヘレンの見た目の容色を、
クレオパトラの尊厳を、
アタランタのあの俊敏を、
ルクレーシアの貞節を。

（III. ii. 138-45）

彼が従来のペトラルカ風恋愛という文学的文脈のなかで彼女に恋していることは明白である。

¹¹タッチストーンのオーランドーの詩のパロディーは、上述の詩に対する異議申したての好例である。

雄鹿が雌鹿を欲しいンド
言うなら会わせろロザリンド。
雌猫が雄猫に恋なんど
すればまねするロザリンド。

（III. ii. 99-103）

ここには、性的欲望の復権がある。

¹²オーランドーの「もう想像だけでは生きていけなくなった」（V. ii. 50）という台詞は、彼の想像的恋愛から現実の結婚志向への恋愛、つまり結婚愛へと転換が完了したことを意味する。

¹³婚礼は偉大なるジュノーの祭り、

幸あれ、寝食をともにせんとの契り、
町々に子を増やすはハイメンのつとめ、
称えよ、しあわせを生む夫婦の誓い、
称えよ、その名を声高らかに称えよ、
町々にしあわせをもたらすハイメンの名を。

（V. iv. 140-45）

¹⁴「地域住民が、共同体的規範に対する逸脱者なり違犯者をなりを、さまざまな方法で制裁するという、…伝統的な民俗慣行」のこと。「シャリバリ」は、＜家父長制＞に対する違犯という名目のもとに祝祭的な性

格をも併せもつ制裁的パフォーマンス。ラフ・ミュージックという賑やかな音楽が伴うことが多かった。
(蔵持 4-6)

¹⁵美しい娘は黄金以上に盗賊の心をそそのものよ。 (I. iii. 106.)

¹⁶(公爵に) この身を捧げます、私は父上の娘ですから。

(オーランドーに) この身を捧げます、私はあなたの妻ですから。 (V. iv. 115-16)

¹⁷ブラッドブルックは、エリザベス朝演劇を論じて、「そのモチーフの幅は案外と狭く、そこには『野心と欲望』だけしか認められていなかった」(Bradbrook 62) と言うが、ロマンティック・コメディを「欲望」を軸に読むことの妥当性の一傍証となろう。

¹⁸しかし、この「封じ込め政策」が成功しているか疑問である。典型的な「善き」家父長制社会である森の宮廷において、皮肉屋ジェイクイズは、「眠れなければエジプトの長子以来の長男嫡子をかたっぱしからののしってやる」(II. vi. 57-58) といって堂々と長子相続制を告発するし、老公爵らの「黄金の世界」での生活を「浮かれ騒ぎはご免です」と言って、参加を拒む。

引用文献

- Babcock, B. A. ed. *The Reversible World*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
Barber, C. L. *Shakespeare's Festive Comedy*. Princeton: Princeton UP, 1972.
Bradbrook, M. C. *Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy*. New York: Cambridge UP, 1979.
Eagleton, Terry. *William Shakespeare*. New York: Basil Blackwell, 1986.
Frye, Northrop. *A Natural Perspective*. New York and London: Columbia UP, 1965.
Montrose, Louis Adrian. "The Place of a Brother" In *As You Like It: Social Process and Comic Form* *Shakespeare Quarterly* Vol. 32 (Spring 1981).
岩崎宗治「異性装と社会変革—『お気に召すまま』(2)」、『英語青年』(1993、11月号)。
荻野昌弘『資本主義と他者』関西学院大学出版局、1998。
蔵持不三也『シャリヴァリー—民衆文化の修辞学—』同文館、1991。
ゾンバルト、ヴェルナー『恋愛と贅沢と資本主義』金森誠也訳、論創社、1987。
ターナー、ヴィクター『儀礼の過程』富倉光雄訳、思索社、1976。